



うぐいすの石笛

【その2】

作:近藤せいけん



うぐいすの石笛 その二

清川村、宮ヶ瀬湖のほとり、一人の若者と
白ひげの老人に出会った

「おまえは、この人生で、何をしたいのじゃ」

「どんな自分に、なりたいのか」と、また

「また七日後、この場所で会おう。おまえが何になりたいか、何をしたいのか、もう一度、聞こう」と約束をしてから 七日目が来た

早春の頃、どこかで、うぐいすが鳴いている。

ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ

心に澄み通り、揺さぶられる、美しい音色である。

宮ヶ瀬の春の色が、少しずつ増してきた。

若者には夢があった。

ふるさと清川の、父の小さな工場で、新しい技術を生み出し、一緒に仕事がしたいと思っていた。

しかし現実は厳しかった。

今の工場では仕事は少なく、無理だという事も解かっていた。

しかたなく、遠く離れた、東京の会社の面接に毎月のように行っていた。

何度も落ちた。

都会暮らしは、若者に合っていなかった。

しかし、両親は大きな会社に入る事を望んで、楽しみにしていた。

自信を、失しないかけていた。人生に疲れていた。

白ひげ老人との約束の日、宮ヶ瀬湖のほとりに着いた。

老人はいなかった。

その時

ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ

心に澄み通り、揺さぶられる、美しい音色が聞こえた。

うぐいすの音がする方を、振り向いた。

白髪の長い白ひげの老人が釣り糸を、たれていた。

少し若者は驚いた。近づいた。

「どうだ、若者、どんな自分になりたいのか。

人生で、何をしたいのか、はっきりしたのか」

若者は素直に答えた。

「いろいろ考えてみた、心の中にあるものをひとつずつ、取り出して考えた」

「俺はこの清川の、父親の小さな町工場で仕事がしたい。 両親と一緒にふるさとの空気のなかで暮らしたい」

「だが、現状は仕事が少なく、食べていくことが出来ない」

「大学で学んだ、技術だけでは、小さな町工場に生かせない。新しい何かがあればいいのだが、それが解からない」

「それが出来ればいいのだが・・・」

長い白ひげの老人は、黙って聞いていた。

「そうか、おまえの望みがやっと固まったようだな・・・」

「おまえの望を、かなえる方法を教えよう、 おまえがよければじゃが、のう・・・」

「え！ 本当ですか。俺は信じます。信じます」

「それは、良かった」

「今日から三日後、この村を下った、厚木の飯山温泉に、ある男が泊る」

「その男は、朝、散歩に小鮎川（こあゆがわ）沿いを歩く」

「山高帽をかぶった、長身の男じゃ」

「会ってみろ」

「おまえの運が、開かれるであろう」

「え 本当ですか～」

「本当じゃ。 ただし おまえ次第じゃよ」

「運は自分の力で開くものじゃ。日頃の下ごしらの努力をしていれば、 いつでも 誰にでも 手に届くところにある」

「信じ、手を伸ばすかで 人生は変わる」

「はい、信じます。ありがとうございます。

このチャンスを、必ず生かします」

長い白ひげの老人は、微笑んだ。

「そうか、それは良かった。ホッホ、ホ、ホ」

微笑みながら、白ひげの老人は一つの石笛を取り出した。

「そう、若者よこの石笛を持ってゆけ」

「この石笛を、山高帽の男に吹きなさい、さすれば、おまえの願いが届くであろう」

若者は石笛を手を取った。

「さあ～吹いてみよ。」

「はあ～はい」

若者は石笛に口にあてた。

「ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ」心に澄み通り、揺さぶられる、美しい音色が宮ヶ瀬湖の湖上に流れた。

長い白ひげの老人は忽然（こつぜん）と消えた。

若者の手に「石笛」が残った。